



元聖人と劣化版スキル使いはダンジョンで生きていく お試し版

意馬心猿

アキ♀

黒髪、黒い瞳。

異世界召喚され強制的に魔物討伐の生贄にされた。

一人称…私

ノヴィガ・ロストアール♂

銀色の髪、緑色の瞳。

背が高く引き締まった存在感の強い筋肉。

一人称…俺（職務中は私・わたくしだった）

……神は関係あるのか世界の矛盾なのか謎めいたゲームのような知識。そこから連想された結果の魔法なのか。スキルとは何なのか。確かに流行りの小説や漫画に載っている情報などで何となく特殊能力なるものだとは思っていた。しかし、これを、どう思うべきか。もしかしたら悪酔いの遊び心だったのかもしれない。

「はあ……」

私は同じタイミングで異世界召喚された若者達と共に胡散臭い王様達が語る迷宮に潜る事を強要された。正直な話、私は自分一人だったならば適当な事を言つて資金を調達し逃げていただろう。しかし和気あいあいとする若者達が無残に死んでいくかもしれない想像に、置いて一人逃げる事は出来なかつた。迷宮に一度でも潜り、状況を共に把握してから説得し皆で逃げる事を目標に私は

罪悪感と偽善と勇氣と救いの融合された揺らめく小さな虚栄心で足を進め。

その結果。

大きな虫型の敵に苦戦して囷として置いていかれた。

「でも仕方ないよね……こんな所で生きれる気もしないし……若人よ頑張れ……」
「聖なる光よ！ 我々を守りたまえ！」

瞼を瞑り即死を願う止まっていれば誰かの声と共に眩い光が瞼裏に届く。何事かと瞼を開ければ眩しすぎて見えない輪郭が目の前に立っていた。

「行くぞ！」

腕を掴まれ青年位の声の持ち主と共に暗い洞窟内を走る。

「あれは一時的に止めただけだからな！ 全く……何故こんな場所に君のような可憐な娘がいるのかは理解したくないが、あのゲスの事だ大体は予想がつく」
走りながら流暢に喋る男に関心しながら最低限しか鍛えられていない身体は直ぐに悲鳴を上げる。二分も走れば限界だった。息も絶え絶え噎せ返る。

「娘よ、か弱いな」

足を止め、よたよた歩きになっていた私を横にして肩上に腹を乗せ両腕を使って重い物を運ぶやり方で動き出す。腹側、特に乳房を圧迫されながら呼吸を調える。自身の体重からくる圧迫感の苦しさにギブアップをしたくなつたが死ぬよりはマシなので涙と鼻水と胃液を溢しながら我慢した。

ドサリ。

何だか綺麗そうな水や光っている苔が溢れる場所に下ろされ。私は酷く咳き込みながら、ぼんやりと辺りを見回した。そして、ようやく自分を背負つてくれている男を見上げる。男は流石に疲れたのか地面に腰を下ろし大粒の汗を溢しながら肩で息をしていた。私を支えて走るまではいかずとも長い間、早歩きだ。疲れないわけではない。

「……あ、ありがとうございます」

呼吸を調べて先ずは感謝を述べた。

「うむ。良い心がけだ」

「あの……ここは……？」

「ここは奇跡の泉という。迷宮の階毎の何処かには存在する魔物が入り込まない希少な場所だ」

「魔物が……素晴らしいですね」

私は死なずに済んだと、ホツと息を吐いた。

「して娘、名前は？」

「あ、秋と言います」

「アキか覚えやすい。俺はノヴィガ・ロストアール……今は無き亡国の……いや、まあ良い。で、アキは何故、こんな場所へ来たのだ？」

「それは……」

私は異世界召喚を、この国にされ若い子供達を置いて逃げるのは気が引けたので共に来た事を語った。

「アキも若い娘ではないか」

「え……多分、ノヴィガさんより全然、年上ですよ」

「ははは！ あり得んな」

唐突に大きな声で笑われて戸惑ったが悪い気はしなかったので年齢を言う。

「二十九歳です」

「ん？ 十九か？」

「いえ、二十九です」

「……ふむ」

地面に膝と尻をつけて座る私の前に近づくノヴィガ。彼の大きな身の影が私の顔にかかった。

「十四、十五の娘かと思っていたが……そうか」

「あはは！ それこそ、ありえないですよ！」

笑うと、ノヴィガが一度、呆けた顔をし、にやつと笑い返す。

「食料の調達は出来なかったが我ながら、これは良い見つけものをしたな……」

「？」

「アキ一人で地上に出る事は出来ないだろう？」

「え、あ……そうですね……まあ戻っても再度、ここに潜れとか言われるんでしようけど……はは……」

「そうだな。あのゲスの事だ。碌な事には成らんだろう」

「ゲスって王様の事ですか？」

「ああ。我が国を滅ぼしたゲスの事だ」

「なるほど間違いなくゲス王ですね」

「ふ、良いな悪く無い。久々に話した女がアキとは、やはり俺は運命の神に愛されているな」

「運命の神……?」

「ああ。俺は運だけは非常に良いのだ。まあ、だからと言って周りは、そうではないがな……」

——……もしかして、お国が滅ぼされて唯一生き残った……?」

「俺を殺そうとしても何かしらの運が働き全て全てが上手く行かず。結果、あのゲス王は俺を、この迷宮に閉じ込める事にしたのだ。勝手に死ぬ事を願ってな」

「な、なるほど」

「だが俺は長い間、此処で生きている」

「凄い」

「ふふ。反応があるのは良いものだ。よし、アキ。ついてこい。俺の寝床の一

つを紹介してやろう」

「あ、はい」

綺麗な水の先に光る苔の群生があり、ノヴィガが両手を伸ばすと、そこがカーテンの如く開き中が開けた。内側には何故か簡易の寝台や棚らしきもの小物類が存在した。

「お家だ……」

「魔物の甲羅や冒険者や騎士の死体などから頂戴した数々だ」

「おお……」

「まあ無益な殺生は好かんから食用以外の魔物は大抵、聖なる光で麻痺状態にして放置が基本ではある。が、偶に勝手に死んでいる時に頂戴するのだ」

「ふむふむ」

「さあ、そこに座れ」

簡易寝台に座らされ彼が薬缶を持って先程入ってきた苔の先へ向かう。

「茶の用意をしてやろう」

問*****

「んっ♡ んう♡」

気が付けば上半身の服は、はだけ乳房を空気の元に出しており顔を上げたノヴィガの眼下に晒されていた。両手で形を確かめるように優しく揉まれ、じつと見つめられる。

「……ずっと、母が子に栄養を与える為に存在する場所に欲情とは何故かと思っ
ていた」

指二本が私の乳首を掴み、指平で、すりすり、くにくにと弄るノヴィガ。手つき自体は優しかったが彼の瞳はギラギラとしており私は自分が女だという事

を酷く意識させられた。

「しかし……肩に乗せた時に気になって仕方がなかったが……これは……あま
りにも柔らかかすぎないか？」

「えあ♡ お、おっぱいはあ♡ そ、そうですね♡ ん♡ その触り方つ
きもち♡」

「その声を聞くと生殖器が疼くな……」

顔を乳房に近付けるとノヴィガは口を空け唇だけで挟み舌を動かした。

「あ、ああ♡」

温かい口内に包まれた乳房の感覚と先っぽが舌で転がされる快感に身が仰け
反る。乳房を触り乳首を戯れに触っていた片手の平を背中に滑らせると、もう
片手は尻下を支え彼は私に吸い付きながら、持ち上げた。

「ひやえ？ ん♡」

突然椅子の上から上げられて彼以外に体重をかける場所が無くなった事に驚

いて頭と背中に縋り付く。彼の吸い付きが強くなり乳首が、じーんつとした甘い痺れを感じ私の股の間が、じゅんつと濡れた。

☆☆☆続きは本編で！

元聖人と劣化版スキル使いはダンジョンで生きていく

発行日 2021年7月30日

著者 意馬心猿

<https://www.pixiv.net/member.php?id=8224911>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
